

---

# トランピア

稀優 梨乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トランピア

### 【Nコード】

N4024H

### 【作者名】

稀優 梨乃

### 【あらすじ】

エレスト王国。そこは、大小5つに分かれている。大きな大きな国。その大小5つに分かれている国の5つのうち1つフアシア国に  
いる、10歳になったばかりの少年がラグナロク（神々の運命）に  
巻きこまれながら、冒険をするお話。

## 〈序章〉

エレスト王国。

そこは、約4千年前からずっと神々から恵まれた土地。5つの大小の国わかれており、人々は豊かに暮らしていた。魔力を持つ人は時に魔法を使いその他の人たちは神を崇め、生を喜び、死を悼んだりし、永いこと神との均衡をとってきた。

だが、平和な国に嵐が起きた。

千年前に黒魔術が流行ったのである。

その魔術は昔からあったのだが、人々は次々と病気のようにとりつかれ、化け物が大量発生した。と言う。

人々はその化け物をスコブースと呼んだ。

王は黒魔術を禁じ、この世からその魔術を消そうとした。

その他、スコブースを退治する技能や魔術（黒魔術を打ち負かす。

しいて言う白魔術）のチーム『クレアクト』を作り、その後何百年間は黒魔術が治まりつつあった。

しかし、スコブースは退治しても、数は減ることはなかった。

逆にスコブースの中にも魔力を持ったり、巨大化したりして、村が襲われ消えたり、退治に行った人々が死んだりもした。

そして、今日に至る。

この物語は今日に生き、選ばれた少年少女の物語。

〈運命のとき 前編〉

預言者は言う。

この国は危機的な状況に陥る。巨大な魔力と人の感情によって

〈運命のとき 前編〉

「スコブースと出会った時の戦い方、逃げ方はよろしいですね。」

「はい。」

「では、復習します。そうね。」

フアシア国孤児院施設。

ここにいるのはよちよち歩きの子から15歳の人までがいる。計68名。

ただいまは9歳〜15歳の中高部の授業中。

「……もうZZZZZZZZ」

赤毛の男の子は授業中にも関わらず、夢を見ていた。

「クリス。これ、わかりますか？」

その子の右隣にいる少年は指導師のカミナリが落ちるまいと思い、その子の肩を思いつきり揺さぶった。

「クリス、起きろ!!」

揺さぶられている少年はうつすらと目を開けた。

「……おめ……?」

「お前当たってるぞ!!」

「え、は、はい!!!!」

そのとき、少年は慌てて、ガタンと飛び跳ね、立ち上がった。と、同時にひざが机にぶつかり、鈍い音になった。

「……いつてー!!!!!!!!」

教室にいるすべての生徒がどっと笑った。

「クリス、授業中です!さてはこの問題は解けるのですね。」

指導師はコンコンと黒板を叩いた。  
そこにはスコブースと遭遇した場合の逃げ方だった。

少年は痛みにこらえながらも、案の定答えられなく、右隣の少年に助けの合図を送ったのだが、頼んだ少年も分からないな曖昧な返事が返ってきた。

少年は、悩んだ末、あきらめることにした。

「えっと。…わかりません。」

さらに爆笑の渦。

・・・少年は、完全に説教されると心から思った。

「はい、静かに。クリス、きちんと聴きなさい。仕方ありませんね・・・では、シユウ答えてください。」

「はい。」

栗色の頭髪の少年はピシッと答えた。

「スコブースにはいろいろな種類があります。足が速い者に出会ったら、目を合わせ睨みつけ、ゆっくりと下がって逃げます。魔力を持つ者は一目さんと逃げ、魔術が使える者に助けを求めます。」

指導師は頷き、「さすがです。クリス！もう解りましたよね？」

「はい。解りました。以後気を付けます。」

指導師は溜め息混じりで、「まあよろしいです。今日のところは見逃してあげましょう。」

その言葉を聞いて、うっしやーと言わんばかり、少年の目は輝いた。がそれはつかの間、次の交渉成立でいっぺんに輝きを失った。

「ただし、シユウ。クリスを指導してくれませんか？」

「はい。分かりました。」

「今回の授業はこれまでです。」

生徒の歓声が聞こえる。

どうやら今日の授業はここまでらしい。

クリスと言う名の少年はため息をついた。

「クリスードンマイ！」

クリスの右隣にいた少年は、ばしっと思いつ切りクリスの背中を叩き、クリスは苦笑せざるおえなかった。

こげ茶の髪をもつ男の子は羨ましそうに言った。

「でもさ。みんなの憧れのシユー兄に指導なんて逆に羨ましいぞー。」



「いいなあー」

「ぜんっぜん良くない。だったらバトンタッチするぜー。」

「あ、でもプレ時間無くなるしなー。」

「オレ、それがイヤなんだよ。ラベル、マジ代わってー!!」

「寝てたお前が悪いんだろ？」

「。。。。。」

「でも、プレ時間とき、クリスがいねえーと成り立たないしなー。特にサッカーとか。」

「そうだろ!!プレ時間はオレが活躍する場所なんだよ!!」

「(否定できない)う。。。うん。」

「だから、代わってくれよ」

お願いしている中。

背後からクリス何かを感じとってぞつとした。

「おいおいクリスーそれをいつちゃーおしまいだな。」

「「しつ、シユー兄!!」「ラベルとクリスは驚いた。」

「ラベルには次、話とか聴いたるからな」話続ける前にシユウはガシツとクリスの肩を組んだ。(ちなみにその時の身長差は頭一個分以上。)

「今日はこのバカを指導しなきゃいけないから。」

「バカってなんなんだよ!」

「はいはい。教室戻って。プレ時間した後夕食済ましたらお前すぐ寝るから今から指導するぞー!」

「えーやだー。」

「やだーと言う前に寝ないことだな。」

シウウが言った言葉が一番、クリスにとって『渴』だった。

「う…ううー」

無論、クリスは何も言い返せなかったのである。

そんな少年たちを遠い目で見てふっと笑い。眼鏡をかけ、封筒を開ける最高指導師の姿があった。

「やはり来ましたか。」

封筒を開けた後、辛そうな溜め息を付いた。

封筒の中には『ロツレ』が入っていた。ロツレとは、王印が入った手紙のことで、内容はこう書いてある。

『フアシア国マナリア・サラ・セラフ最高指導師様この度、『クレアクト』のため、7人選抜して旅に出させることを求める。』と。

「これは、即座に会議を開かねば…」老いた指導師は皆を呼ぶベルをなるそうとした時。

・ガシャゴン ガシャゴン・

ガラス戸を叩く音が聞こえた。

その指導師は手を止めその叩く音が聞こえた窓の方へと行き、カーテンを開けた。

そこにはアメジストの瞳を持つ若いシスターが立っていた。

その指導師は、ああ…という顔をして、窓を開けた。

「お忙しいところ、それから、窓際での対談で申し訳ありません。」

「いえ、お久しぶりことです。」と会釈した。

続いて、「あなたが来るということは何かありましたのですね。」

「はい。」

若いシスターはそのまま続けて言った。

「今日。こちらに『ロツレ』が届いて、7人旅立ちさせると思いましゅ…。」

このことは普通の人が訊いたら驚いててしまうのだが老いた指導師はそのシスターの事情を知っているので、平然と答えた。

「ええ。そのような手紙が来ました。」

「時間がありませんので単刀直入に言います。その7人の中に『例の子』を入れてください。」

老いた指導師は顔色を変えた。

「…いくらあなたが言うことでも、いつてはならぬことがあります。まだあの子は10歳になったばかり、それに指導をきちんと受けさせていません。」

若いシスターはただ、最高指導師を見つめるだけだった。

その指導師は気づいた。

「まさか…」

「はい。先日旅立ちさせました。旅立ちといっても、あの子にとって残酷なことをしたと思います。貴方様がお察しの通り、まだあの子はおにも満たない子です。」

沈黙が流れる。

最高指導師はさらに顔を暗くした後、何かがふっきれ、決心し、先に沈黙を破った。

「…そうでしたか。ついに来たんですね。」

若いシスターは目を合わせ、少し躊躇って答えた。

「はい。ラグナロク（神々の運命）の日が。」

「あなたの予言は当たるとお訊きしますから。」

「面目ないです。」

若いシスターの後ろからこそつと顔や腕に怪我をしたショートヘアの女の子が顔出した。

「その子も？」

「はい。今からアウオーク国へ。」

指導師は穏やかな笑みをうかべてから言った。

「…あなたは本当に重大なことを隠し通したのですね。」

若いシスターは最高指導師に会って、初めて俯いた。

そして、女の子の方をちらっと見て、再び顔を戻し、固い微笑みで別れの挨拶を述べた。

老いた指導師もその相応の別れを述べ、若いシスターは女の子の手を引つ張って、風のように去った。

その二人が見えなくなった後、最高指導師は呟いた。

「…神に御加護がありますように…」

瞼を閉じて、一瞬何かを考え再び瞼を開き、若いシスターが来る前の動作を実行した。

・リンリンリンリン・

すぐさま、他の指導師たちが、最高指導師室に集まった。

そのちょっと前クリスマスはと言うと仕方なくシユール兄の指導を受けていた。

ちょうど、若いシスターが女の子を連れて行く時。

たまたまクリスが窓側に目を逸らした時ちょうど、女の子と目が合った。

(綺麗な青い瞳…。)

クリスはその瞳に吸い込まれるかのようにその女の子が去るまで見ている…とは言えなかった。

”バシッ”

「いってー!!!」

シュウはクリスをノートで殴った。

「クーリースー。せっかく教えてやってんのにとっち見てんだよ!」

「いや、だって…あゝー!!!」

クリスは飛び上がって、すぐに窓の方に駆け出した。

「なんだよ。急に大きい声と行動して。」

「ああ…行っちゃった。」

「…誰かいたのか?」

「いたけど。」

シュウはコイツは授業よりも、人間観察とか動体視力がよろしいらしい。と思った。

「はあー全く、勉強に関しては集中力ないんだから。」

「うるさいっ。」

「まあそーぐねんなくて、技能の方は他の子と比べていいけどな。」

クリスはシューを見た。

「でも、オレより技能もまったたく、まだただけどな。」そう言っ  
て、クリスの頭をくしゃつとした。

「なんなんだよー絶対シュー兄より抜いてやるんだから！」

「そう言っておけつ。まあ俺を抜きたいんだつたらちゃんとして授業を  
受けるよ。」

「う…う…う…うん。」

「それより、誰がいたんだ？お前相当、じろーて見ていたから知っ  
てた人でも来たのか？」

クリスは首を左右に振った。

「全然知らない子。女の子だったんだけど、青い瞳が綺麗くって、  
異邦人かな？」

「確かに、この国には青い瞳を持つ子は居ないからな。」

クリスとシューはその青い瞳の子について

それぞれ別のことを考えて、しばらく、二人はうん唸っていた。



〈運命のとき 前編〉（後書き）

人物紹介です。

主：クリステイファー・セラフ

（セラフというのは最高指導師のネームからきている。クリスたちがいる孤児院の子達は全員セラフ or サラがついています。）

性格はやんちゃ坊主つまり、ガギ大将。年齢10歳

通称はクリス

シューシャ・セラフ

頼りになるしっかり者のいい兄貴。年齢15歳

通称シュウ、シュー兄

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4024h/>

---

トランピア

2010年11月21日03時07分発行